

せ と る

く お ー た り ー

C.E.T.L. Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.18

発行日 04. April. 2005

巻頭言 図書館サイトからのデータベース活用

図書館長 大崎 素史

2004年度創価大学FDフォーラムが、2月23日（水）A棟で開催された。この午前の部の一部に、中央図書館企画「図書館サイトからのデータベース活用」が行われた。教員に対する図書館初のワークショップ企画であり、私も参加させてもらった。午前10時～12時、LB110教室の会場に、30名ほどの教員が講師山口喜一郎中央図書館課長並びに多くの職員のご案内にPC操作に懸命であった。

なぜこの企画が出てきたのか。

図書館の中で、とりわけ大学の図書館は、ハイブリッド化の進展が著しく進んでいる。ハイブリッド（混成・雑種）化とは、従来の紙（ペーパー）による媒体（メディア）資料と電子媒体資料の混成状況が展開しつつあるということである。当然、後者の電子媒体資料の出現とめざましい展開が見られるが故の状況である。図書館の利用という点からいえば、ここに大いなる知的情報の展開が広がっている。自身の研究と授業への活用、学生のレポート・論文作成などの学習・研究指導において大きな効果が期待される。その契機となるデータベース活用のし

かたを提供したいとの思いからこの企画が出てきたのである（昨年12月図書館運営委員会にて承認された）。

講師の山口課長の解説によれば、図書館は、「紙メディア図書館」→「機械化図書館」→「電子図書館」へと移行していこう（M.K.バックランド『図書館サービスの再構築』）とのこと、「私たち図書館員が振り返ってみたとき、まさにそうした流れに沿って図書館が進化していると実感しておりますし、予想以上のスピードと広がり、電子技術の深さに驚いております」とのことに、参加者も改めて時代と環境の変化に決意を新たにした。

当日のプログラムは、次の通りであった。

- ①資料入手の基本的プロセス
- ②創価大学図書館ホームページ
- ③入手ステップA：本学蔵書検索
- ④入手ステップB：データベースについて
 - ・図書：Webcat PLUS
 - ・雑誌論文：CINII
 - ・新聞記事：読売新聞
 - ・辞書：ジャパン・ナレッジ

⑤入手ステップ C：他大学図書館資料の入手：
文献複写・図書借用・訪問利用依頼

⑥入手ステップ D：図書購入依頼

⑦図書館からのお願い

私自身、データベース活用のワークショップ参加は初めてだったので、得るところ、思うところが多くあった。まず Webcat PLUS などのワードに直に触れて PC 世界のヨコ文字に対する抵抗感がかなりなくなったこと、やはり学生にこのようなスキルを教える機会を増やすべきだ

ということ、研究・教育のための資料検索・収集の利便性・効率化・広範性を実感できたこと、そして山口課長をはじめ職員の方々の日々の懸命な職務の遂行があればこそこのようなワークショップが開催できるという感謝の思い、等々である。

学年末休業中の 2～3 月のこの時期は、新年度に向けての準備で教員・職員にとっては非常に重要な時期である。今春はこのことを特に感じて、会場を後にした。

教室ディベート活用法のワークショップを開催

昨年の 11 月 17 日に CETL 主催のディベート・ワークショップが A 棟 1 階会議室において開催された。講師には常葉学園短期大学の鈴木克義助教授をお迎えした。鈴木先生は『勝者のディベートー変革を起こす意思決定の技術』（Fujitsu Books）や『ディベートでいじめがなくなった！一人権感覚を育てるディベート教育のすすめ』（明治図書出版）などの著者で、ディベートの理論と実践の研究に取り組まれている。



鈴木克義先生

ワークショップの前半では、ディベートの進め方や留意点が解説され、後半は参加者がグループを組んでディベートを実際に体験した。

本学では LTD 学習法など協同学習技法を経済・経営学部の基礎ゼミに導入するなど、学生の主体的な学びを促す講義技法を積極的に取り入れている。ディベートも学生が学びを自分に取り戻せる重要な技法の一つになるものと期待される。



FD 海外視察報告

CETL では文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」選定を受けて、これまでに米国 の諸大学に視察団を送り、高等教育機関における最新の教育・学習支援事情を調査・検討してきた。

本年度も二回の海外視察を実施した。初回は 2 月 6 日～10 日までの間、ウィスコンシン州ミルウォーキーにある Alverno College に調査団 5 名を、もう一つは 2 月 27 日から 3 月 6 日までの間、オハイオ州立大学およびアメリカ創価大学に同じく 5 名を派遣した。最新の FD 事業の調査から、今後の創価大学における教育・学

習支援の充実のための多くの示唆が得られた。

ミルウォーキーのセミナーに参加した小林孝次先生より感想をお寄せいただいた。



オハイオ州立大学サクセスセンター

Alverno College での特別セミナーに参加して

2 月 6 日（日）から 3 泊 5 日の日程で、シカゴから約 90 マイル北上したウィスコンシン州ミルウォーキーにある Alverno College において私達のために特別に設定されたセミナーに、私は CETL の坂本辰朗センター長、関田一彦副センター長、清水強志特別センター員、岡田勇経営学部講師とともに参加させていただいた。

ミルウォーキーといえば、ミラービールが有名であるが、それ以外は取り立てて扱われるものがない町のように思われていた。ところが然らば、Alverno College の評価プログラムが大変注目を浴び、アメリカ中西部におけるベスト・リベラルアーツ・カレッジとして Alverno College が存在していたのである。

教育・学習活動支援センター員 小林 孝次



セミナーの参加者

同大学は、ローマカトリック教会の伝統の下に設立された女子大学として 1887 年にスタートし、1946 年に 4 年生大学となり、現在は学生数約 2500 名、専任教員数約 200 名で構成されている女性中心の大学である。学生の大半は決し

て裕福ではなく、多くが家庭や仕事を持っている。しかも4分の1がマイノリティであるという。こうした大学が1973年に大きな大学教育改革を行ったのである。

その最大の特徴は評価方法としてABC評価をしない、また能力に応じたカリキュラムをもとに、リベラルアーツとして以下の8つの能力の開発を重視した教育を行っているという点にある。

それらは、1. Communication, 2. Analysis, 3. Problem Solving, 4. Valuing in Decision Making, 5. Social Interaction, 6. Global Perspective, 7. Effective Citizenship, 8. Aesthetic Responsivenessの8つである。各教員は担当科目のシラバスにおいてこれらの能力（のいくつか）を成果として明記する。そして各科目すべてにおいて、これら8つのポイントを踏まえて、ABCではなく記述評価、特に学生自身による自己評価（Self-Assessment）、さらに教員に加えて500名にも及ぶ研修を受けた地域・学外からの教員以外による評価、これらが明確な基準のもとに徹底して行われている。さらにセメスター終了後はもちろんのこと、それに加えて毎週金曜日の午後には授業をなくして、評価のための会議を

もち、学生の為にすべての教職員が一丸となって積極的に取り組んでいるという。



セミナーの様子

今回のセミナーに参加して、私にとって印象的であったのは、Alverno Collegeは学生数の小さなリベラルアーツ・カレッジであるとはいえ、明確な目標と基準のもと、全学あげてさらにはその地域の人々をも含めて教育に取り組んでいる姿、また教育方法的にはまず学生自身に理解の度合いを明確にさせてから出発する点などである。これらは、今後の私自身の教育活動への取り組みに少なからず影響を与えるであろうと思われ、私にとって今回のAlverno Collegeでのセミナー参加は大変有意義な研修であった。

海外視察参加者一覧

坂本 辰朗（教育学部、センター長）、関田 一彦（教育学部、副センター長）、
馬場 善久（経済学部、副学長）、 神立 孝一（経済学部、創価教育センター長）、
尾崎 秀夫（WLC、センター員）、 小林 孝次（経済学部、センター員）、
岡田 勇（経営学部、センター員）、 清水 強志（特別センター員）、
福島高善（教務課担当課長）

2004 年度創価大学 FD フォーラムを開催

CETL 主催の創価大学 FD フォーラムが 2 月 23 日（水）に開催された。80 名を超える参加者が A 棟に足を運び、授業改善の方法や GP の動向に耳を傾けた。

午前の部と午後の部を合わせて 4 つのワークショップの他に、吉田文メディア教育開発センター教授を講師に迎え、FD 講演会「学生へのよりよい学習支援と教育改革」も合わせて企画された。若江学長は、学習と教育両方の支援体制をさらに充実させたいとの抱負を語り、「教育

という崇高なるお仕事のご成功をお祈り申し上げる」と参加者に挨拶した。



セッション 1

中央図書館が中心に企画した「図書館サイトからのデータベース活用」は、ワークショップにおいて教職一体となったはじめての試み。図書館蔵書検索システム、データベース、他大学からの資料取り寄せ、図書購入依頼など、図書館の有効利用の仕方を、参加者一人ひとりが実際にコンピュータを使って体験した。



パソコンを利用したワークショップ

アンケートには「すごく利用しやすいと感じた。資料の電子化が日進月歩の発展で、年に一

回は図書館のデモンストレーションに出ないと十分に活用できないと実感しました。」「学生たちにも身に付けさせたい。学生、院生のガイドランスも多く開催してもらいたい。」「学生にも大いにアナウンスしていきます。」などが見られ、図書館が提供するツールに習熟することは、研究ばかりでなく、学生の学習スキル向上を支援するために役立つとの感想が多く寄せられた。

ワークショップを担当した図書館の山口さんからは、「授業連携による研究・学習支援ができる図書館に、との目標を掲げて、様々な改革に努める中、今回 FD フォーラムにおいて図書館ワークショップを開催させていただいたことは、大きな 1 歩であったと思います。紹介する内容が多すぎたため駆け足の説明になったことで、全体としてあまり満足のいく説明ではなかったにもかかわらず、本ワークショップに高い評価をいただけたのは、今回ご紹介したデータベー

ス等の機能が、ご参加された教員の方々の授業改善のニーズにピッタリ合致したためであると思われます。今後、図書館としましても、更に教員の方々に授業に役立つデータベースやイン

ターネットサイトをタイムリーにご紹介をしてまいりたいと思います。」との感想が寄せられ、今後の図書館が取り組む教育・学習支援の展望が語られた。

セッション 2

関田一彦教授（教育学部）と高木功教授（経済学部）が担当したワークショップでは、「LTD 学習法の工夫」をテーマに、話し合い通した学習方法の概要とその有用性が説明された。休憩を挟んで、参加者はグループを組んで LTD 学習法を実際に体験した。

「講義と話し合いの学習をどのようにして組み合わせたらよいか。」「この学習法で学生の学習意欲は本当に高まるのか。」など、多数の質問が飛び交う充実したワークショップとなった。



LTD を体験する参加者

セッション 3

今回のフォーラムでは、学外からの専門家にも講師として参加して頂いた。『成長するティップス先生』（8 頁参照）で知られる名古屋大学高等教育センターの鳥居朋子先生から、「授業づくりの工夫」をテーマに、ご提案を頂いた。

授業を魅力的にするためには、まずはシラバスを学生に対する契約書として捉えて、これを明確に作成することが大切であり、授業デザインのかなめは「シラバス設計」であることが強調された。その他、「優れた授業実践のための 7 つの原則」やそれに基づく具体的な実践手法についても解説を頂いた。

（詳細は <http://gs.cshe.nagoya-u.ac.jp> を参照）。

「授業改善のための教員間の協力体制をどう

図るべきか。これについて名古屋大学のセンターではどのような教育支援を行っているのか。」「7 つの原則はどんな授業にも当てはまるのか。」など多数の質問が出され、授業改善に向けて活発な議論が行われた。



鳥居朋子先生

セッション 4

園田雅代教授（教育学部）が担当したセッションでは、「学生との対応の工夫」をテーマに、アサーション・スキルの概要と実践についての紹介があった。アサーションとは、自分の気持ち・意見・考えなどを相手に伝えたい場合は、なるべくわかりやすく、しかもその場に合った適切な方法で伝えようとする自己表現のこと。参加者は、こうした自己表現のスキルを具体的にどう使用したらよいかを、グループを組んで実際に体験した。

園田教授が、「たびたび体調不良を理由にして、締め切り時間を過ぎて、レポートを提出する学生に対応しなければならない場面」を例示して、参加者はこの場面に対して、アサーション・スキルを活用した対応方法を考えた。



園田雅代先生

学習上の問題ばかりでなく、生活に多様な困難を抱える学生に対して、教師には学生の自己決定を促す対応の仕方が求められている。この意味で、教員がコミュニケーション・スキルに習熟することも、充実した学生支援を図るために大切なポイントになるものと思われる。

FD 講演会「学生へのよりよい学習支援と大学教育改革」

吉田文教授（メディア教育開発センター）を講師に迎え、本年度3回目となるFD講演会が開催された。吉田先生は『FDが大学教育を変える』（吉田文／三尾忠男編・文葉社刊）などFDに関する多数の著書をお持ちでもあり、専門家の視点からCOLの背景や今後の動向などについて貴重なご意見を頂戴した。

GPの選定の観点には、大学が独自の理念に照らして、目標を具体的に設定しているかどうか、その達成のために組織的・継続的な実践に取り組んでいるかどうか、そしてそれを適切な評価方法によって測定し、なおかつ教育効果を上げているかどうかにあるとされた。



吉田文先生

本学では、CETLの教育実績の選定に続いて、「学生のための大学」の理念を掲げた新たな取り組みをはじめている。このアクチュアルで示唆に富む講演に参加者は真剣に耳を傾けていた。

CETL 研修合宿を開催

年の瀬の 12 月 28 日・29 日の両日にわたり CETL 関係者の合宿研修を長野県にて開催した。研修会では山崎教務部長、坂本センター長を中心に、CETL の学生支援活動や FD 活動に関する現状報告と改善点、今後の CETL の展望について集中的に討議された。その他の参加者は以下のとおり。神立孝一、犬塚正智、吉川成司、小林孝次、戸田龍樹、関田一彦、西浦昭雄、岡田勇（計 10 名）。



Information

- 池田輝政/[ほか]著『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集』（玉川大学出版部）

若手のティップス先生があれこれ授業に悩み、トライ・アンド・エラーを繰り返しながら、どうにか半期を乗り切るまでが日記風に描かれています。シラバスを設計する段階から、学生の成績評価、講義の反省の段階までをよりよく運ぶヒントが後半で体系的にまとめられています。ちなみに表紙の動物はモグラではなく、夢を食べるバグだそうです。是非ご一読を！



- 2005 年の CETL の窓口業務は 4 月 4 日（月）からはじまります。時間帯はこれまでの通り 12 時 30 分～17 時までとなっています。
- 経営学部 of 岡田先生に講師をお願いして、「大人数クラスにおける携帯電話を利用した出席管理システムの提案」をテーマにワークショップを開催します。日時と場所は以下のとおり。4 月 5 日 15:00～16:30、LB110 教室。

編集後記

編集作業は慎重すぎるくらい慎重であることが必要だと感じます。2005 年度の FD フォーラムも無事終了しました。ご協力いただいたみなさまに心から感謝申し上げます。(U)

C. E. T. L Quarterly No. 18

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町 1-236

Tel : 0426 (91) 9782 内線 : 2146

E-mail: cetl@soka.ac.jp